

東京女子大学
「外国人留学生特別科目」
外部評価報告書

2017 年 7 月

東京女子大学「外国人留学生特別科目」外部評価委員会

1. 外部評価委員名簿

かとう さなえ
加藤 早苗 氏

インターカルト日本語学校 校長

こばやし ひろし
小林 浩 氏

リクルート進学総研 代表

よしとみ あさこ
吉富 朝子 氏

東京外国語大学大学院教授

(50音順)

2017年 6月 28日

東京女子大学「外国人留学生特別科目」自己点検・評価に対する
外部評価結果

外部評価委員 加藤 早苗

【総 評】

外国人留学生を対象とする当科目は、全体を通して「東京女子大学グランドビジョン」に掲げられた項目のうち、特に「グローバル化・高度情報化した 21 世紀の社会を切り拓き、国際社会で活躍する女性を育てる」ことに合致、大学として目指す人物像の育成に寄与する教育課程、授業内容を目指したものであると思われた。

ただし、カリキュラム・ポリシー第 4 項に示された「社会生活において必須となる汎用的な能力」のうち課題探求力、問題解決力、論理的思考力の育成においては、さらなる改善の余地があると思われる部分もあった。

(優れている点)

外国人留学生が大学での学習に必要な日本語の運用能力を身につけることを目標とする「日本語Ⅰ（入門）」及び「日本語Ⅱ（応用）」は、教育課程、授業内容、学修成果のいずれの観点においても秀でるものがあると思われた。大学がカリキュラム・ポリシーとして掲げた、「社会生活において必須となる汎用的な能力」（知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、問題解決力、表現能力、コミュニケーション能力）の育成に向けて授業内容が熟考されており、学生アンケートにもその学修成果の高さが数字として表れていた。

「日本語Ⅰ」においては、1) レポート執筆に必要な文章表現やルールを毎回学びながら、自ら選んだテーマでのレポートを完成させていく過程を Semester 全体を通して体験させ、2) 各自固有の話題での作品作りをしながら、メディア・リテラシー、メディア作成技術を身につける、といったように、与えられた課題をこなすのではなく、自主的に学ぶ環境を授業の中に作り上げているところが評価できる。

「日本語Ⅱ」においては、習得した基礎能力を駆使して、1) プレゼンテーションをする、2) 書く、というアウトプットの能力育成に力点を置き、毎回の教室活動を通してそれぞれの回に掲げられた授業目標を確実に達成できるよう考えられている。

また、「日本事情」の科目においてもカリキュラム・ポリシーが色濃く反映されていると思われる科目もあった（「日本事情 C」）。各回、映像を通して現代社会に在る問題を直視し、言語化した自分の考えや、ディスカッションを踏まえてレポート作成へと導いているとこ

ろが評価できる。

(努力課題)

カリキュラム・ポリシーとして掲げられた育成すべき能力のすべてにおいて、知識の集積、つまりインプットではなく、すでにある知識や能力を使ってさらに前に踏み出す力、つまり思考しアウトプットする能力を求めているのに対して、「日本事情」の各科目で扱われている授業内容や方法の多くがインプット型であるように見受けられるのが残念である。到達目標にもカリキュラム・ポリシーを反映した項目がない科目や、コミュニケーション能力の育成を掲げながら具体的な場面が想像できない科目が少なからず存在するように思えた。

さらには、これは教育課程全体の中での科目設定の考え方に関わることなので一概に言えないが、題目（テーマ）として非常に大きなものを掲げているにもかかわらず、扱う授業内容がその限られた一部分であったり（日本事情 A）、展開する学習場面が期を通して似通った内容であったりする（日本事情 B）など、学生の授業に対するモチベーション上の懸念をもったものもあった。また、興味や関心をひく内容ではあるが、限られた時間の連続である 1 セメスターの中で、その前後の関係や具体的な授業内容、学修成果が見えにくい科目があり（日本事情 D）、それがアンケート結果にも表れているように思えた。

※資料 1 「(10) 外国人留学生特別科目」の「日本事情 B」と「日本事情 D」に書かれた【概要】がまったく同じ文章でした。

2017年6月23日

東京女子大学「外国人留学生特別科目」自己点検・評価に対する
外部評価結果

外部評価委員 小林 浩

【総 評】

教育目標およびカリキュラムポリシー第4項に即した教育ができているかという点に関しては、「日本語」、「英語初級」、「日本事情」ともに社会生活において汎用的な能力の育成を目指した教育課程となっており、学生アンケート結果からも肯定的な回答が多いことは評価できる。学生アンケートの回収率も88.9%と高く、しっかりと外国人留学生をサポートできていることがうかがえる。一方、日本語力を高めるための“書く力“の強化、英語初級における”グループワーク“の受講者増加、段階的な教育プログラムの策定については、今後の改善が求められる。また、創立100周年に向けて「東京女子大学グランドビジョン」および「大学として育成する人物像」を策定されているが、それに即した形での外国人留学生の教育方針の見直し、検討が今後期待される。

(優れている点)

カリキュラムの中で、特に「日本語」における「ドキュメンタリーの制作・発表」については、様々な日本語の汎用的な能力に必要となる。制作・発表のプロセスを通じて統合的かつ実践的な発信力が身につくプログラムとして評価したい。

(努力課題)

自己点検評価にも記載があるが、日本語力を高めるための“書く力“の強化、英語初級が開講された場合における適正人数でのグループワーク運用、段階的な教育プログラムの策定については、改善が求められる。また、今後については、外国人留学生に対しても、創立100周年に向けて策定された「東京女子大学グランドビジョン」および「大学として育成する人物像」に記載されている、課題解決型教育や多文化共生社会への対応、キャリアを構築する女性等の育成方針に即した形での教育目的や教育内容の見直し、検討が期待される。

2017年 6月 28日

東京女子大学「外国人留学生特別科目」自己点検・評価に対する
外部評価結果

外部評価委員 吉富 朝子

【総 評】

おおむね評価できる。外国人留学生のための語学および日本事情等の特別科目を開講し、少人数指導を実現している。カリキュラムの規模は小さいものの、教育目標に沿ったプログラムであると評価できる。一方で、具体的な授業内容については、若干の改善が求められる。

(優れている点)

- ・外国人留学生のニーズに合わせた語学の授業を日本語および英語について開講しており、いずれも4技能の育成を目指している点。
- ・少人数クラスや複数の教員によるティーム・ティーチング体制がとられており、恵まれた学習環境が整っている点。
- ・日本語（語学）に加え、日本について学ぶ日本事情の科目も用意され、講義型授業だけでなく、ディスカッション等のコミュニケーション活動を中心とした授業も提供されている点。
- ・学生によるアンケート評価がおおむね肯定的であり、プログラムに満足していると思われる回答結果が得られている点。
- ・自己点検評価において問題点が把握され、特別科目の統括管理を担う責任部署の必要性等、改善に向けた検討が進められている点。

(努力課題)

- ・語学の授業の到達目標に関しては、プログラム全体の目標においても、個別シラバスにおいても明記はされているが、具体的に何ができるようになることを目指すのか、というレベル設定が必ずしも可視化されていない。例えば日本語であれば日本語教育スタンダード、英語であればヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)といった客観的な言語評価指標

に基づいた Can-do 記述子による目標レベル記述があれば、達成を目指している語学力が学生にもより具体的にわかりやすく提示できるようになるかもしれない。

- 英語の授業については、到達目標として 4 技能のバランスのとれた修得や、英語によるコミュニケーション力の向上が掲げられているが、シラバスから判断する限りでは、比較的技能別の活動が中心になっており、4 技能をそれぞれ練習するような総合的な学習はあるものの、技能統合型の活動が少ないように見受けられる。大学の教育理念である「国際社会で活躍する」人材育成のために英語教育の強化をするのであれば、より統合的な言語能力を伸ばす授業が初級段階から求められる。提示されている英語初級クラスのシラバスは、旧来型の文法シラバスに基づく授業内容であり、コミュニケーション力を促進するための文法指導という位置づけになっていないという印象を受ける。アンケートの自由記述でも一名ではあるものの、もっと英語を実際に話すなど、言語を使う機会の多い授業内容を要望する声があったことから、英語(語学)の授業内容について改善が求められる。
- 自己点検評価報告でも問題点として指摘されているが、英語科目をより体系的に配置することが必要である。2015 年度、2016 年度に関しては英語初級を必要とする受講者がおらず、開講されなかったとあるが、仮に初級クラスが不要であると判断した場合には、初中級～中級レベルのクラスを代わりに設け、留学生が一般学生用の英語科目の履修にスムーズに移行できるような段階的な指導を受けられるカリキュラムにすることが望ましい。
- 日本語の授業についても 4 技能のバランスのとれた育成を目指すという目標が明記されているが、自己点検評価報告においては、ディスカッションやプレゼンテーションに重きを置いた指導は十分になされているいっぽうで、アカデミック・ライティングの指導が不足している点が指摘されていることから、必ずしも 4 技能を万遍なく学べるカリキュラムにはなっていないことが伺える。
- 日本事情に関する科目については、留学生が日本語で日本について学習することにより、日本に対する理解を深め、併せて日本語の運用能力も高めることを到達目標とすると明記してあることから、内容言語統合型学習(CLIL)を目指していると思われるが、シラバスを見ると、日本語で日本について学ぶ授業計画は記されているものの、語学面の指導については明示的には記されていない。日本語で日本について学ぶ副産物として日本語能力が上がることは確かに期待できるが、日本語能力の向上も到達目標であるとはっきり詠うならば、より CLIL 型の授業内容、すなわち日本への理解を深めつつ、必要に応じて語学面についても明示的な指導を組み込んだ授業計画を検討してはどうかと思う。例えば日本事情の授業において課されているレポート作成において、ライティング指導をより体系的に取り入れることなどが考えられる。

以上